

# Anthropocentrism or Ecocentrism? : On the Two Environmental Visions

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/4441">http://hdl.handle.net/2297/4441</a>               |

## 「人間中心主義」か「エコ中心主義」か

——代替的環境ビジョンをめぐる——

生 田 省 悟

### 〈はじめに〉

本稿は近年の環境言説に頻出するふたつの言葉、「人間中心主義」と「エコ中心主義」をとり上げ、それらが使用される局面、様態、根拠を分析すると同時に、用語それ自体としての意義と妥当性に関する批判的考察を試みるものである。筆者による議論の焦点は、とりわけ「エコ中心主義」——「人間中心主義」の蔓延を克服するという期待のもと、多くの状況下で流布している用語——にあてられる。そして、「エコ中心主義」が「人間中心主義」の代替的ビジョンとなる資格を有するのかが論じられるであろう。とはいえ、いまだ調査が不十分であるとの理由から、筆者は明確な結論を得るにはいたっておらず、研究過程の一端を提示するのみにとどまっていることを断っておく。

環境が現代社会における喫緊の課題であり、地球規模での対応が不可避であるのは論をまたない。その際、いかなる方策を採るにしても、思想的な共通基盤を構築する一助として「人間中心主義」と「エコ中心主義」が内包する諸問題を整理しておくことが必要だと思われる。なぜならば、この両者にまつわる検討・確認事項は、環境の現況とは無縁の単なる用語という次元を超えているばかりか、私たちが環境（問題）と向き合う際の新たな視座と展望をも予感させてくれるからである。

## 〈「人間中心主義」と「エコ中心主義」〉

環境思想、環境倫理、環境文学など、環境をめぐる現代の諸領域にあつては、「…中心主義」(“centism”)なる用語と概念がこたわりなく用いられている。悪化の一途を辿り、今や危機的な状況に陥ったとされる地球環境問題を直接に論じる際に、そしてまた、それを背景としたさまざまな語りにおいて「…中心主義」が飛び交うということだ。たとえば「人間中心主義」(anthropocentrism/homocentricity)、「生命中心主義」(biocentrism)、「エコ中心主義」(ecocentrism)、「技術中心主義」(technocentrism)などである。<sup>(1)</sup>これらがすべて、対環境、対自然における人間の認識、思考、心性、価値観、あるいは生活様式のありようを主題とする議論の方向性と深く関わっていることは改めて指摘するまでもなく、むしろ常識の部類にはかならない。さらに言えば、この現象は海外における言説のみならず、おそらくは海外の動向から強い影響を受けてきたであろう国内の各種文献等にも明確に見てとれるところである。

なかでも、一般に幅広く浸透しているのは「人間中心主義」と「エコ中心主義」だと思われるが、それらの何が問題であるのか。前提要件として、こうした言葉が出現する場面の文脈をふまえつつ、いくつか具体的に指摘しておくのが適切であろう。まず環境人類学者ケイ・ミルトンは、自然保護における人間の「感情」(emotion)の意義を論じた自著の基本的性格と関連づけながら、次のように述べている。

自然保全は一般に「人間中心的」な自然観に基づいているが、これは、人間に対して利益をもたらすがゆえに自然に価値を置くとの考えかたである。しかしながら本書は自然保全をも含むより広範囲な分野を含んでいて、その分野を私は「自然保護」と呼ぶことにする。本書は、自然および自然界の事物に対するあらゆる保護の取り組

みを包括するものである。ここにはディープ・エコロジーや、人間以外の動物あるいは自然の実体(樹木、森林、生態系、自然全般、母なる地球)の権利と幸福に対する配慮が含まれる。このような配慮は一般に「エコ中心的」あるいは「生命中心的」だとされる。自然と自然界の事物は、それらが人間に資するために有するであろう利益の如何にかかわらず、それら自体においてそれら自体の価値を有するとみなされるのである。<sup>(2)</sup>

この一節におけるミルトンの立場は、「人間中心主義」と「エコ中心主義」(そして「生命中心主義」)の二分法があたかも自明の行為として、きわめて素朴に受容されうる発想であることをみごとに物語っている。そればかりか、その記述内容からは、自然の内在的な価値への配慮とつながる「エコ中心主義」が新たな環境ビジョンにふさわしい資格を備えているがゆえに、好ましく、かつ妥当なものであるとの判断さえ明白に読み取ることができる。

あるいは、フォルトとフロードマンの編纂した環境哲学論文集の序にも、やはり見逃せない一節が含まれている。彼らの指摘によると、

たとえば、「人間中心主義」と「エコ中心主義」との間で頻繁に繰り返される論争といった、より大きな展望がたえず見え隠れしているにもかかわらず、環境哲学は環境倫理学の領域内に安住し続けてきた。そのため環境哲学は、現代哲学の手法や技法を用いて自然を新たに考え直す試みとしてではなく、カント的境界の内部に囲い込まれた企てとして出現したのだった。<sup>(3)</sup>

この箇所では主題とされているのは環境哲学の系譜(守旧性)が内包する問題点である。そして、批判の根拠として、新たな「より大きな展望」の可能性を秘めた「人間中心主義」と「エコ中心主義」とによる「論争」の意義が指摘

されている。とはいえ注目すべきなのは、やはり、ここにおいてもまた、「人間中心主義」と「エコ中心主義」とが暗黙の了解のもと、環境哲学における議論の有意な対象として対置関係のうちに配されている点である。両者の名称やその指示内容は自明なことであって、それらにあえて注釈を施す必要などありえないということであろう。

ひるがえって、日本においてはどのような記述が見られるだろうか。問題がより鮮明な形で露呈されているという意味から、野田研一の場合を見ておこう。野田は九〇年代初頭から、アメリカ環境文学／ネイチャーライティングを紹介するという先駆的な立場にありつづけ、その功績は大いに賞賛されてしかるべきである。実際、彼が『交感と表象』のいたるところで披瀝する個別の環境文学作品研究・批評の着眼点と手法は鋭く、その優れて独創性に富んだテキスト分析からは教えられるところが大きい。ただ、野田がこの文学ジャンルの研究動向と研究書群に言及した箇所には、いささか気がかりな部分も含まれている。「文学研究と環境研究の接点」を手際よく概略する過程で現われてくる、「人間中心主義批判」との小見出しが付された一節を引いておこう。

ここ一〇年ほどの短期間のうちに、アメリカ文学の世界でネイチャーライティング研究が盛んになった理由の一つに、「環境中心主義」(ecocentrism)への思想的転換が重要な問題となったことが挙げられる。広義の環境問題や環境政策の現場でも、いまなぜ環境が問題となるかといえば、それは自然を資源として利用・活用するといふやり方が、健全な自然生態系のあり方と矛盾するばかりか、それを破壊するといふかたちでの一種の収奪行為であったからである。したがって、現在の環境問題における基本的な了解事項のひとつが、自然環境それじたいを中心とする生態学的関係構造の中で、人間的な行為や働きかけを再検討するという方向で議論は進んでいる。環境倫理学が設定したこのような倫理的配慮の拡大、あるいは逆転は、少なからずネイチャーライティングの世界でも強力な主題として前景化されている。右に挙げた研究書のほとんどすべてが、従来の人間中心主義的自然

観の徹底批判を介して、自然と人間の関係の再定義へと向かおうとしている。<sup>(4)</sup>

「ecocentrism」に「環境中心主義」なる訳語をあてることの適否はさておくとしても、伝統的な「人間中心主義」が環境問題の根本原因であるからには、いかにそこから脱却すべきなのか。そして「自然環境それじたいを中心」とする「環境中心主義」へと位相転位をはたし、質的変換を遂げるべきなのか。こうした論点の構築は、野田自身が認めているとおり、欧米の環境倫理を踏襲したものだと言つてよい。ところが、環境文学分析の実際において精緻かつ斬新な読みを見せる野田でさえ、「…中心主義」にかぎつては、基本的了解事項とみなされることがらを復唱するだけ終始してしまっている。惜しまれるのは、ふたつの「…中心主義」が「人間と自然の関係の再定義」という洞察といかに関わりうるのかを、野田自身がさらに深く追求していない点である。

相異なる領域におけるこれらの三例を瞥見したときに共通項として抽出されるのは、対立概念を構築することにより事態の打開を図るという、典型的な議論設定パターンである。つまり「人間中心主義」が露骨に表象する傲慢さを克服し、それにとって代わる展望をもたらすはずの「エコ中心主義」を構想しようとする戦略のことだ。環境(問題)に対する新たな地平を切りひらいてゆく熱意という意味で、これはかなりの説得力を帯びているかのようにも思われる。だが、そうした反面で、ミルトン、フォルトツとフロードマン、野田はいずれも、「…中心主義」ひいては「中心」なる概念に潜むある種の危うさを指摘してはいない。<sup>(5)</sup>あるいはむしろ、それを見逃しているのではない。構築された対立概念の図式に安住している様子からすると、彼らの言説はいかにも西欧的な論理形式と価値判断様式のうちに埋没しているような印象すら与えるのである。

## 〈中心／人間中心主義の思想〉

日常言語において「中心」とそれに類する言葉がごく自然に用いられているという現実がある以上、「中心」を設定する行為それ自体は取りたてて議論する必要もないと考えられるかもしれない。「中心」なる概念が古くから西欧で受容されてきたことは、思想史をあえてひもとくまでもない、二元論に関わる基本かつ普遍的な了解事項だといえるのも事実であろう。それでもなお、「中心」をいただく思想の様態に正面から再接近してみる必要があるのではないか。すなわち端的なものいいをすれば、「中心」とは、「周縁」を想定することで構築される概念にほかならないのである。このときに忘れてはならないのが、「中心」と「周縁」という差異を設定する際にしのび込んでくる意図的な逆説・すりかえの効果であろう。つまり、「中心」が存在するゆえに「周縁」が存在するという論理の裏側にはしばしば、「周縁」を故意に見出し、特定しようとする試みが潜んでいる。そして、「中心」の存在とその意義を保証し補強するための意図が露骨に作用しているのである。その典型的な形式は、たとえばキリスト教の正統と異端との関係をめぐる論争が駆使するしたたかなレトリックに求められる。要するに、異端の存在を指摘し、弾劾することはとりもなおさず、正統という価値の存在証明へと容易に転位してゆく契機を孕んでいるのである。そして、転位の瞬間を生起させるのが、何らかの政治的な意図であることは論をまたない。こうした「中心」と「周縁」とをめぐる機序については、特に「エコ中心主義」を考える際に改めて指摘することになろう。

一方、すでに確固たる概念である「人間中心主義」の場合にあっても起源は古く、一般にはユダヤ・キリスト教の系譜、とりわけ『旧約』以来の伝統に由来するものと考えられている。碩学キース・トマスが神学者、哲学者、また文学者の著作ばかりか庶民階層の間にさえに行きわたる豊富な、そしてときには滑稽と思われる事例を渉猟しつつ辿ってみせたように、自然＝被造物を徹底的に周縁とみなすことによって成り立つ「人間中心主義」にまつわ

る主張には枚挙のいとまがない。<sup>(6)</sup> 人間の優越性が確信される根拠として、人間は神の姿に似て創られ、理性を有するがゆえに他の被造物の比ではありえないし、あるはずもないとは広く流布しているとおりでもあった。しかも「中心」と「周縁」というある種、水平面での関係を位相変換するなら、そこには垂直性つまり階層性が出現する。このとき、やはり西欧の伝統的世界観に通底していたものとして周知の概念である「存在の連鎖」を思い浮かべるべきであろう。「存在の連鎖」は、被造物間の連続性を肯定すると同時に理性的存在たる人間を別格視し、それらの頂点に位置づけたことで、徹底的な差別化を肯定してもいたのである。

このように二重に理論武装された「人間中心主義」からは、動物であれ植物であれ、被造物、すなわち周縁かつ下位に置かれる存在としての自然は、人間の利益という目的にひたすら奉仕する手段としてのみ意義を有するとの視角がきわめて容易に導き出される。「人間中心主義」とは、議論の余地のない、断定的な価値判断に等しいのである。このような意味における「人間中心主義」が西欧の文明の根底をなしていた事実は強調されてしかるべきであろう。トマスはまた中世西欧社会について、「当然ながら、人間の文明化とは自然を征服することと実質的に同義である。植物界はつねに食料や燃料の供給源であったし、労働力としてであれ、食料や衣服、輸送の手段としてであれ、動物資源にことのほか依存していた点で、西欧は当時すでに特異な社会であった」とも述べている。<sup>(7)</sup> 「人間中心主義」の必然的な帰結であり、これに類した形式は今日の私たちの発想をも強く支配してしまうにいたっている。たとえば道路建設などの開発計画や公共事業をめぐって、「自然」が大切なのか、それとも「人間」の暮らしが大切なのかといった議論がいまだにしばしば繰り返されるが、多くの場合、後者が優先される事態がつづいている。それは、卑近な政治の場面において「人間中心主義」のある部分を具体的に言い表わしているはずだ。

環境哲学・環境思想の領域にあつては、まさにこの確固たる「人間中心主義」こそが厳しい議論の俎上にのせられる。その理由は、野田が概観したように、人間が自らの利益と幸福を追求するべく、自然を利用し搾取しつづけ

てきた行為が高度に産業化された近代社会システムに行きつき、結果として現在の環境破壊の元凶となったという一点にかかっている。すでにトマスなどを介して見てきたように「人間中心主義」の論理からすれば、価値において絶対的に優先されるべき人間には、あらゆる自然資源を利用し、自らの暮らしを豊かにする権利があるというのだ。さらに、生態系を一切顧慮することなく、自然の内在的な価値を黙殺し、ひたすらその道具的な価値を強調した結果が環境破壊という大いなる過ちにつながってゆく。これこそが「人間中心主義」に対する懐疑の内実である。そして、「エコ中心主義」はそのような「人間中心主義」のありかたをめぐる批判的議論を母胎として出現する。

### 〈エコ中心主義の錯覚〉

微妙な相互作用のもとに成立する自然の自律的な生態系に配慮し、自然の内在的な価値を認識し敬意を払う。そして、環境破壊をくいとめ、生きとし生けるものの存在基盤である地球の永続を願って、可能なかぎりの努力を惜しまない。こうした心性が、自然に対する「人間中心主義」のエゴとそれに基づく価値観、社会経済活動、生活様式のありかたに反省を促す最大の動機となっているはずだ。「エコ中心主義」はこのような動きを背景としている。それが用語として誕生するにいたった直接の経緯の詳細は不明だが、その精神的支柱となったであろう思想の系譜を思い浮かべることはできる。たとえば、「土地の倫理」(land ethic)を提唱したゆえにアメリカ環境思想の記念碑的著作とされるアルド・レオポルド『砂土地方の暦』(A Sand County Almanac, 1949)がある。レオポルドは「土地の倫理とはまさに共同体の領界を拡大し、土壌、水系、植物、動物、あるいはそれらの集合体、すなわち土地を含むものである」と指摘した上で、こう結論づける。

要するに、土地の倫理はホモ・サピエンスの役割を土地共同体の征服者から普通の構成員ないし市民へと変化

させる。それは他の同じ構成員に対する敬意、そしてまた、そのような存在としての共同体に対する敬意を含意しているのである。<sup>(8)</sup>

レオポルドは、生態系概念に基づく「土地の倫理」によって「人間中心主義」の克服と脱中心的な「共同体」の構築をもくろんだのである。この一節は、「エコ中心主義」がたとえ一部であれ、その核心において、レオポルドの衣鉢を確実に受け継いでいることを力強く予言しているはずだ。こうして「エコ中心主義」は、「土地の倫理」などの思想を背景としつつ、二〇世紀の終わり近くに急速に広まることを宿命づけられたのであった。<sup>(9)</sup>そして、明確な意思と感情が負荷された標語として環境言説に関わる主要な指針のひとつとなってきたのである。先に引用した文献群からも覗われるのは、すでに「エコ中心主義」が自明の正義として完全に受容され、定位されるにいたった事態にほかならない。たとえばミルトンの立場は、自然がもっぱら人間のための「道具としての価値」などではなく、本来の「内在的な価値」を有するという思想的転換の要請を字義どおりに反映しているものと理解される。

このように、「エコ中心主義」には首肯しうる主張が含まれているとはいいながらも、名称（そして実体）に問いを発しないまま、それに身を委ねてしてしまうことが私たちには許されるのであろうか。そもそも「人間中心主義」と「エコ中心主義」とを対立的に捉えることがはたして可能なのか。人間と自然・環境との関係を真摯に考察し、環境が突きつける難題と向き合うためにも、このような疑問に関する再考と整理が必要とされるであろう。いくつかの異なった次元での検証がなされるべきであるが、ここでは特に重要だと思われるつぎの四点に限定しておく。まず用語・概念の側面から「中心」として想定されるものについて、つぎに、これと対をなす「周縁」とは何かについて、さらに「人間中心主義」批判における「人間」という概念の不分明さについて、最後に「中心」の思想ないし「中心」を設定するという思考様式それ自体についてである。いずれにしても、これら四点が相互に関連

し合うものであるのは明らかであろう。

「エコ中心主義」という場合、「中心」とされる「エコ」とはいったい何か。私たちの語彙としてすでに定着して久しい「エコシステム」や「エコロジー」はもとより、“*ecothology*”や“*eco-anarchism*”までも含む派生語群の存在からも一目瞭然のように、「エコ」が「環境」を表象するものであるとの通念はすでに形成されてしまっている。しかも「エコ中心主義」が「人間中心主義」と対置されることから、「エコ」が「人間」の対立概念であるとの合意も得られているように思われる。それにもかかわらず、あくまでも対「人間」という次元から捉えたとき、「環境」としての「エコ」を「中心」と設定することにはある種の曖昧さがたえずつきまとうと考えざるをえない。

ここで常識に近いことがらをあえて繰り返しておく、「エコ」という言葉がこれほどまでに私たちの間に浸透していった直接の契機となっているのは「エコロジー」意識の高まりであったはずだ。この「エコロジー」にせよ、それ以前に流通していた「エコノミー」にせよ、言うまでもなく、それらを分節した際の「エコ」とは「家」(*oikos*)を意味する。したがって、この語源的要素をさらに敷衍して考えるならば、「エコ」とは人間あるいは生物が暮らす基盤としての場所、直接の住環境と再定義されているはずだ。だとすれば、「エコ」を「中心」だとする論理は成立しえないのではないか。すなわち、「家」の意義と機能とは、そこに住まう存在と主体との関係においてはじめて評価されるものであって、決して自律的な主体ではありえない。むしろ「中心」として位置づけられるべきなのは、「人間」ないし「生物」だからである。

あるいは「エコ」の意義を補強するもくろみから、この論議に「エコ中心主義」の重要な支持概念であるはずの「エコシステム」を導入したとしても、事情は変わらない。「エコシステム」とは、あくまでも所与の場所(Ⅱ家)の内部におけるシステム構成因子の相互関連や有機的なネットワークを指示する概念であり、その含意するところは「中心」とは相容れないものである。それにもかかわらず、あえて「エコ」を「中心」にすえようとする立

場は、「人間中心主義」が人間を中心に置き、すべてに優先させた事実がもつ明快さと説得力とは大いに異なり、「エコ」が喚起するイメージの政治性に拘泥したために陥った言語・論理矛盾とみなすことができるであろう。

さらには、「中心」に関わる定義づけの不徹底とある意味では表裏をなす現象を「周縁」の不明瞭さのうちにみとることができる。すでに指摘したように、「中心」とっては「周縁」が不可欠であるが、同時に、その論理には「周縁」の明確な存在こそが「中心」の絶対性を保証するという逆説が確実に潜んでいたはずである。だとすれば、「エコ中心主義」における「周縁」をどこに見出すべきなのか。「人間中心主義」批判であるからといって、

「周縁」に位置づけられるのは人間ではありえない。なぜなら、環境破壊をもたらした元凶が西欧的人間の文化、思考様式、価値観、社会経済活動等にあると認める以上、それらを変質させ、新たな方向を模索する責務は当然のことながら人間の側がになわなければならないからである。人間の行為と環境の危機を考察し、将来の展望を模索する試みの主体は人間自身でしかありえないのだ。その意味からすれば、(かりに可能なのであれば)むしろ「中心」の精緻な再構築を試みつつ、「人間」をこそ再度「中心」に定位する意義を模索したほうがより健全だとさえ言える。<sup>(10)</sup>こうしたことがらを考慮の埒外に置いているかぎり、「エコ中心主義」は「中心」ばかりか「周縁」の概念形成に関しても考察を怠っているとことになりはしないか。したがって、目標とする思考の到達点が「エコ」のイメージのみが優勢な地点に過ぎないのではないかとの疑念がまたしても生じてくるのである。

ところで、筆者はこれまで「人間」なる言葉を注釈なしに使用してきた。とはいえ、「人間」が多くの意味を包摂するがゆえの危うい言葉であることを認識していないわけではない。とりわけ留意すべきなのは、西欧の言説における「人間」があたかも普遍性を帯びた概念であるかのように喧伝され、私たちもそれをごく自然に受容してしまっている現状だ。この点に関する省察に裏うちされないまま、人間の対自然、対環境における立場をふり返るとき、「人間」というあまりにも画一的な規定は問題の所在を明らかにするかにように見えて、実際には混乱を助長

しかねないからである。この意味から、ある研究者が記したソーシャル・エコロジーとエコフェミニズムの主張に  
関する説明には注目したい。

環境的災禍の重荷を背負うのは誰か、また、そのような結果をもたらす行為によって利益を得るのは誰なのか。  
環境保護論者が促進する政策から利益を得るのは誰か。そのような政策を実行するために負担を強いられるのは  
誰なのか。ソーシャル・エコロジストとエコフェミニストはいずれも、こうした問いに対して人間（＝人類）と  
いう漠然とした言葉を用いつつ、たとえば「人間（＝人類）が環境破壊の被害をこうむる」とか「人間（＝人類）  
が原生自然保全から利益を受ける」と答えるようにする者を批判する。そのような概括的な言い分は人々の間に存  
在する重要な識別点を見落としているのだ。代わりに、私たちは環境問題とその解決策に関して、誰が利益を得  
るのか、誰が代価を支払うのか、誰が責めを負うのかを厳密に検証しなければならない。<sup>(1)</sup>

これは、人間による自然の抑圧と搾取に先行する人間による人間の抑圧と搾取、すなわち社会に厳然として存在し  
つづける階級制度や性差別を問題とする一節である。当該の（西欧的）社会構造に関わる議論の文脈から離れたと  
しても、これが示唆的なのは、「人間」なる概念に包括される諸要素を峻別する必要を説いていることだ。まさに  
「誰が」が問われるのである。したがって、「人間中心主義」が環境破壊をもたらしたのは事実であり、それを自  
ら批判する姿勢をとるべきだとしても、「人間」の意味内容に問いを発しないかぎり、この言葉を全面的に採用す  
ることは躊躇される。なぜなら環境問題への誠実な対応を試みるには、ある社会における階層構造のみにとどまら  
ず、地理的・経済的要因をも含めた諸文化、それぞれの地域における人間と自然との関係に見られる差異を踏まえ  
た視点、要するに各人が生活の基盤を考察する根拠となるリージョナル／ローカルな視点が不可欠だからである。

概念的な「『人間』中心主義」に対する概念的な批判はこの側面からしても、「エコ」のうちに錯綜しながら存在する関係性への洞察を欠いていると思われてならない。

すでにある程度は述べてきたつもりだが、上述の三点と解きがたくながれているものとして、ここで特に強調しておきたいのは「中心」を設定せずにはいられない、あるいは依拠せずにはいられない思考様式・心性の呪縛についてである。「中心」は「周縁」を必ず想定する発想にほかならない。したがって、いささか乱暴なものいいをするなら「∴中心主義」とは、いわば価値をめぐる差別（と排除）の思想と同義であって、「人間中心主義」はその典型だと言えるであろう。だとすれば、率直な疑問として、これと対置されるものが「中心」を温存する思想でさしつかえないのであろうか。むしろ、「人間」を「中心」とするか「エコ」を「中心」とするかとは、思考の枠組みにおける同一平面上に発現してくる二者択一、しかも曖昧さをたたえた選択行為であり、根源的な意味における対立性がそこには成立していないとみなすことさえできる。結局、「エコ中心主義」に対する筆者の疑念はこの点に収斂してゆくのである。環境問題が西欧の「人間中心主義」に究極に起因するというのであれば、根幹に立ちかえり、「中心」ひいては「周縁」を基軸とする論理の克服を試みる方向性こそが求められているのではないか。真に「人間中心主義」からの脱却をはかるためには、「中心」なる概念の図式を踏襲する行為それ自体に向けた異議申し立ての可能性を模索することが欠かせないのではないか。環境という困難な課題と向き合う際のそうした努力こそが、たとえば野田の言う「人間と自然の関係の再定義」にいたる道を切りひらいてゆくように思われてならない。

### 〈関係性のありか——エコ中心主義を超える〉

以上、環境思想・環境哲学などの領域で力説される「エコ中心主義」という標語がなかば必然的に抱え込んでし

もう概念的矛盾と混乱を「中心」なる側面から考察してきた。ただし、その意図は「エコ中心主義」を無意味なものとして全面否定するのではなく、むしろ、これが訴えかける思考と価値観のパラダイム変換を真摯に受けとめつつ、環境に対する新たな認識形成のための整理を試みることにあった。たとえ「中心」なる概念をそぎおとしたとしても、「エコ中心主義」のうちに相変わらず響きわたっているはずのメッセージ——たとえばレオポルドの「土地の倫理」——を、私たちはどのように建設的に継承してゆけばよいのであろうか。

「エコ中心主義」に対する疑問や異論があるとすれば、それは、この主張自体に影響をおよぼした思想の系譜を再検証・再評価する過程から生じてくることが予想される。可能な範囲で文献資料を検索したかぎり、言葉としての「エコ中心主義」の曖昧さを指摘した唯一の例と思われる見解が、やはりレオポルド研究のうちに見出せる。その議論に耳を傾けるのが有効であろう。ケネス・メイリーはそのレオポルド論において、「人間中心的」(anthropocentric)と「エコ中心的」(ecocentric)に代わる言葉として“anthropogenic”と“ecogenic”を用いることを提案している。力点は“ecogenic”に置かれているが、それを説明する際、彼は接尾辞“-genic”に注意を喚起すると同時に、これをさらに“gen-”と“-ic”に分節する。“-ic”には「属する」という語義があると言うだけで足りるため、“gen-”の語義と機能がもつばら考察の対象となってくる。

gen-が絶え間ない運動、変化、生成、発生、発現—創生—のことを言っているのに留意したい。私たちはecogenicが「静的な、変化のない自然」に関するものではないことに注意を傾けるのだ。・・・私たちはまた、ecogenicが地球という家、地球に住むこと、あらゆる生命体の親密さのことを言っているのに注意を傾けるのである。ecogenicであるということは人間を排除することではない。・・・

したがって、私は「人間中心的」や「エコ中心的」よりもanthropogenicやecogenicという言葉を好む。「人間

中心的」にあつては何らかの中心、優先順位、あるいは出発点が指示され、中心としての人間、優位に立つ人間ということになるが、*ecogenic* において指示されるものの全体像はどこにも中心を定められてはいない。それゆえ、私はこちらのほうを選択するのだ。また、私は *biogenic* よりも *ecogenic* という言葉に少しかり肩入れしたい。<sup>(12)</sup> なぜなら、*ecogenic* が家庭全体、地球という家のもつ親密な関係を思い描くと同時に言いあててもいるからだ。

これは、直接には新たな用語を提起したものである。“*anthropogenic*”が「人間の活動がもたらす影響」を指示する言葉としてすでに辞書に採用済みであるとすれば、<sup>(13)</sup> ここで提案された造語“*ecogenic*”とは「絶えず変成する動的な環境」を語義とするというものである。だが、「*ecogenic* であるということとは人間を排除することではない」やその「全体像はどこにも中心を定められてはいない」とのメッセージからも読み取られるように、対立的に捉えられてきた「人間中心主義」と「エコ中心主義」が尾を引く形式論理からの脱却を図ることが、この一節における最大の眼目だと考えられる。さらにメイリーの議論が示唆的であるのは、たとえばそれが「人間」という概括的呼称、「人間」と「エコ」なる機軸設定などに関わる西欧的思考のパターンを踏襲しているとはいえ、中心の思想を排除するとともに「エコ」の語義を再確認することで「人間」と「環境」との直接的な関係を前景化している点だ。これを「人間」と「環境」の徹底的な読み直しと換言してもさしつかえない。とりわけ「*ecogenic* であるということとは人間を排除することではない」との意見からは、両者を必ずしもたがいに相容れない概念として捉えてはいない立場、また、「人間」による「環境」への関与という現実をみする姿勢さえもが窺われる。

これを相対化の観点から整理してみると、まず、所与の場所における人間にとっての環境とは、地理的・気象的要因を含む自然条件のみならず人間自身の活動の過程と結果から生じる単位として理解される。その際、重要な

は、人間のさまざまな行為が自らにとつての具体的な環境を形成するということだ。また、同じく所与の場所における何らかの植物種に注目した場合、自然条件ばかりか、人的 (anthropogenic) な影響に起因する種の絶滅のおびただしい事例が物語るとおり、人間の活動がしばしば生育や存亡をめぐる主要な環境的要因として関与してくる。しかも土地開発や温暖化といったように、自然条件それ自体さえ人為的影響に左右されてしまうのだが、これこそが「人間中心主義」か「エコ中心主義」かとの議論を招来させる、深刻な環境問題の根幹にはかならなかったはずだ。「人間」の位置づけを曖昧にしたままの「エコ中心主義」は、この点からも実体としての意味をなさないのである。だとすれば、むしろ、環境を人間の行為と自然とが複雑に作用し、交錯することで成立する空間的かつ時間的な単位と捉える視角こそが有意となろう。関係性の視角である。

関係性の視角を有することは、重層性および多様性の認知へと通じている。つまり、環境に対する接近のありかたとしては、温暖化など近代西欧の技術文明や社会経済活動に起因するとされる地球規模の課題、メイリーの言う「地球という家」が陥った苦境を人類全体がになうという対応の方法がある。これは「人間中心主義」の発想の正当性を問うという責務に等しい。また、それと並行して、それぞれ異なる場所における人間の行為と自然との相互作用から現出する環境に対する洞察も欠かせない。それは、ソーシャル・エコロジーなどの立場が強調する社会内ヒエラルキーの存在を考慮するのみにとどまらず、具体性と個別性をおびた人間の営みと自然との関係に接近することを意味する。すなわち、異なる地理的風土や文化的風土のみならず心理的風土をも視程におさめたときにはじめて、鮮明な輪郭を帯びて立ち現われるはずの環境 (問題) の実相に深く立ち入ることができるのではないか。環境が所与の場所での継続的な利用行為、あるいは搾取、破壊を含む人間と自然との関係性の現われであることを確認するならば、環境問題のそれぞれに対し、現代社会を席卷する西欧の支配的価値観を決して一方的に強要するのではない、的確かつ有効な方策確定への道が試みられるであろう。<sup>14</sup>「人間中心主義」と真の意味で対立するとは

首肯しがたい「エコ中心主義」に盲従し、それをひたすら喧伝する以上に、「地球という家」全体とそれを構成する地域的要素、つまり人間と自然との多種多様な関係性を組み込んだ視角こそが、「環境」の領域でも希求される所以である。

註

- (1) 「技術中心主義」については、ディープ・エコロジーの提唱者として著名な Naess, 15-16 を参照。該当箇所では、これが「エコ中心主義」と対置されている。
- (2) Milton, 5.
- (3) Folz and Frodeman, 3.
- (4) 野田研一、二三四頁。
- (5) Abram, 22-23 は、初期人類学が東南アジアなどにおけるシャーマンの呪術を「超自然」と結びつけるのみで、そのエコロジカルな視点を見逃していたことについて、自然観をめぐる西欧的「自民族中心主義」(ethnocentrism) の影響を指摘している。「・・・中心主義」の呪縛を例外的に意識した発言であろう。
- (6) Thomas, 17-50、あるいはナッシュ、二四頁訳注(18)を参照。
- (7) Thomas, 25.
- (8) Leopold, 204.
- (9) 筆者の知るかぎり、OED 補遺や各種辞書に“ecocentrism”は未収録である。今後収録される場合、どのような語義が記載されるのかに注目したい。
- (10) 優れたネイチャーライターとして知られるウォレス・ステグナーが「場所の感覚」をめぐって記した、次のような文章は注目に値する (Stegner, 201)。「ディープ・エコロジストは人間中心的であってはならないと警告しているが、人が住んでいようと野生のままであろうと、世界を見るための術として、私は私自身の眼を通す以外の方法を知らない。無論、世界は私だけのために創られたのではないし、私たち人間、ことに移動する者たちが世界に対して行なってきたことに關しては、私も同罪である。しかし、私が世界を享受し理解するために用いることのできる唯一の手段は、この私だけなのだ。」このとき問題となるのは、言うまでもなく、「私」がどのような立場から、どのように

「世界を見る」かである。また、Plumwood, 69-77も参照。附言すると、「人間中心主義」と「エコ中心主義」を考察する過程で Plumwood を知ったことは有意義であった。オーストラリアの“pushwoman”の出自であるエコフェミニストと筆者の論点はまったく異なるものの、彼女の「人間中心主義」批判および「…中心主義」に関する議論からは多くの示唆を得ている。

- (11) Des Jardins, 239. またブックチン、一〇一一頁、六五頁他も参照。
- (12) Maly, 291.
- (13) *OED* 補遺によれば、初出例は一九二三年、植物生態学関連文献においてである。
- (14) たとえば、先進国企業が途上国で操業する際のいわゆる“corporate accountability”を環境と人権の観点から丹念に分析した論文集に Zarsky (2002) がある。その対象事例からは、現地市民と土地や自然との関係、人権意識、また現地政府の姿勢などが多様であるがゆえに、先進国の論理に基づく画一的な方策では充分に対応しえないという現実が浮上してくる。

#### 引用・参考文献

- Abram, David. “A More-Than-Human World,” *An Invitation to Environmental Philosophy*. Ed. Anthony Weston. Oxford : Oxford UP, 1999 ; 17-42.
- Des Jardins, J.R. *Environmental Ethics : An Introduction to Environmental Philosophy*. Belmont : Wadsworth/Thomson Learning, 2001.
- Foltz, B.V. and Robert Frodeman. Eds. *Rethinking Nature : Essays in Environmental Philosophy*. Bloomington : Indiana UP, 2004.
- Leopold, Aldo. *A Sand County Almanac and Sketches Here and There*. 1949 ; Oxford : Oxford UP, 1968.
- Maly, Kenneth. “A Sand County Almanac : Through Anthropogenic to Ecogenic Thinking,” in B.V. Foltz and Robert Frodeman. 289-301.
- Milton, Kay. *Loving Nature : Towards an Ecology of Emotion*. London : Routledge, 2004.
- Naess, Arne. *Ecology, community and lifestyle*. Trans. and ed. David Rothenberg. Cambridge : Cambridge UP, 1989.
- Plumwood, Val. “Paths Beyond Human-Centeredness : Lessons from Liberation Struggles,” in Anthony Weston. 69-105.
- Stegner, Wallace. “The Sense of Place,” *Where the Bluebird Sings To the Lemonade Springs*. London : Penguin, 1986.
- Thomas, Keith. *Man and the Natural World : A History of the Modern Sensibility*. New York : Pantheon, 1983.
- Zarsky, Lyuba. Ed. *Human Rights and the Environment : Conflicts and Norms in a Globalizing World*. London : Earthscan, 2002.
- 野田研一『交感と表象 ネイチャライティングとは何か』松柏社、二〇〇三年
- ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利 環境倫理の文明史』松野弘訳、TBSブリタニカ、一九九三年
- マレイ・ブックチン『エコロジーと社会』藤堂麻理子他訳、白水社、一九九六年